

緒 言

菊地 臣一

福島県立医科大学整形外科

わが国は、急速な勢いで超高齢社会に突入した。その結果、社会のあり方や制度の全面的な見直しが迫られている。しかも、その変化は急激で大規模だけに、参考となるモデルが他に見当たらないのが現状である。このことは、医療の世界でも例外ではない。

整形外科の領域では、人口構成の変化、すなわち、少子化と長寿社会が、われわれ整形外科医の「求められる役割」に変革を促している。それは、「cure」だけでなく「care」の重視である。こういう状況のなかで、われわれはそのあり方も含めて変わらなくてはならない。

われわれ整形外科医は、「手術もできる運動器のプロ」として、この超高齢社会がもたらしたさまざまな運動器疾患の予防や治療に、新たな概念で取り組まなければならない。

この特集では、「cure」の最前線での課題の一つである腰椎変性側弯症の手術を取り上げた。

この疾患は、いくつかの複雑な問題を含んでいる。まず、画像で認められる所見と患者の愁訴の有無、あるいは内容は一对一の関係ではない。それだけに、患者の愁訴を注意深く聴き、評価する必要がある。2つめに、変性すべり症に伴って発生することが多いために、下肢に神経症状を合併していることが少なくない点である。しかも、その神経症状は、圧迫高位や部位が複雑である。それだけに、詳細な神経症状の分析が求められる。3つめは、腰痛の合併である。腰痛の発生源が、真にこの疾患に由来するかどうかを見極める必要がある。慢性腰痛は、今や、単なる局所の問題にとどまらず、寿命や健康に深く関わっていることが明らかである。それだけに適切な治療が望まれている。4つめは、手術に関して未解決な課題が多く含まれていることである。除圧や固定術の適応の可否、矯正術や固定術式の内容や範囲は、今なお見解の統一は得られていない。

これらの問題を解決するためには、緻密な study design による臨床例の積み重ねが必須である。本特集は、私が発案して豊根知明先生(帝京大学ちば総合医療センター)に企画していただいた。本特集が、この疾患の治療の進歩に少しでも貢献できれば、この企画は成功である。読者には、この疾患に対する手術の最前線を理解してもらえれば幸いである。